

『就実論叢』第42号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2013年2月28日 発行

## テロリストの孤独

— 『密偵』における反秩序と孤独

渡 辺 浩

# テロリストの孤独

## — 『密偵』における反秩序と孤独

渡 辺 浩

### 1. はじめに

コンラッド (Joseph Conrad, 1857-1924) の『密偵』 (*The Secret Agent : A Simple Tale*, 1907) は序文によると、本人自身も認める大作『ノストローモ』 (*Nostramo*, 1904年) とエッセイ集『海の鏡』 (*The Mirror of the Sea*, 1906) を完成した後の、かなり精根尽き果てた状況で取りかかった作品であることを認めている。ほんの些細な友人との会話がきっかけとなりアナキストの活動と事件に興味を惹かれた作家は、『ノストローモ』同様に小さなヒントから大きな想像力の産物であるこの作品を完成したことになる。

コンラッドは帝国主義的な趨勢に異議を唱え、また社会秩序を乱す活動に対しては厳しい態度をとり続けていた。以下はその姿勢を如実に表す一節である。

I remember, however, remarking on the criminal futility of the whole thing, doctrine, action, mentality; and on the contemptible aspect of the half-crazy pose as of a brazen cheat exploiting the poignant miseries and passionate credulities of a mankind always so tragically eager for self-destruction. That was what made for me its philosophical pretences so unpardonable.

(Author's Note, *The Secret Agent* ix-x)

また芸術家としての使命というものを『ナルシサス号の黒人』 (*The Nigger of the 'Narcissus'*, 1897) の序文でも明確に示しているが、彼は運命観とか神の大いなる摂理というものを信じていた様子を窺わせる。そしてその摂理的なものは、大きな秩序へとつながり、それを乱す者は彼の哲学に反するわけである。すなわち広い意味で人間としての自然な生き方や社会の健全な営みというものは、その摂理に合致するものであり、テロリストや無政府主義者などはそうした摂理に反するものということになる。もちろんそれでは、その摂理のはっきりした定義とは何かと問われると、コンラッドは明確に提示しているようには思われない。社会の秩序と言われても人間がこしらえたものであるから、何が秩序なのかということ自体が問題である。しかしコンラッド作品の全般から窺えることは、様々な状況の中で一途に健全に生きようとする人々自体の生き方が秩序であり、また長い船員としての生活から、1つの社会の規律を遵守することの大切さというものを彼は常に自覚していたように思われ

る。そうした生き方そのものがコンラッド流の秩序、特に社会秩序という解釈ではないかと感じられる。したがってテロリズムというものは感覚的にも彼の忌み嫌うものであることは明らかである。ジョン・サーガル (Jon Surgal) は“*The Secret Agent: A Simple Tale of X IX Century?*”の中でコンラッドが感じていた社会的な危機感を以下のように説明する。

The author of *Secret Agent*, in any event, was a man whose background suggested to him that social suicide was no mere theoretical concern. Conrad saw those “simple virtues” of nineteenth-century British society he so revered at risk of being exploded by the volatile present of 1906, by its potentially cataclysmic future, by the Conradian nightmare of a self-destructive twentieth century. (131)

以上のように「社会的な自殺行為」(“social suicide”)としてテロ行為をとらえ、同時代の危機感と将来的な危険性をもってそれを感じていたことを指摘している。そしてこの作品では英雄的でない等身大の人物たちを配することにより、臨場感をもって危険にさらされた社会情勢を描いている。

この作品はコンラッドがヴァーロック (Verloc) という中年の冴えないテロリストを通して、その生き方と愚かさを描き出した作品である。彼はベルグレイヴィアン地区(Belgravian)というロンドンの繁華街に近い路地で怪しげな日用品を販売している店を経営し、店番は家族である妻のウィニー (Winnie) とその母親に任せ、専ら某国 (ロシアと思われる) 大使館に出入りして諜報活動を行ったり、テロリスト仲間たちと自宅で会ったりしながら、実効力があるかどうか疑わしい活動を続けているという日常を送っている。上述の通り、コンラッドはテロ活動に対する嫌悪と、その無意味さにある種の滑稽さも感じていたのではないかと思わせる節がある。それは前章で論じた無政府主義者に関わる短編、「密告者」や「無政府主義者」の描き方にも窺える点である。つまり「滑稽に値するほどのばかげたこと」という主張が感じられるのである。したがって、この作品も長編で、かなり緻密にストーリー構成がなされている部分があるが、ある意味で娯楽的な読み物として、主人公の悲喜劇が面白く描かれているという見方もできる。最終的にグリニッジ天文台爆破という大それた計画を行う羽目になり、それに失敗したあげくにヴァーロック自身もはっきりと気づかぬ間に、秩序の軋轢の狭間で寂しい人生の幕を閉じる悲劇である。

様々な孤独な主人公を描いているコンラッドが、この作品においては特に突き放したような態度でどの登場人物たちも描いており、仮出獄中のテロリスト仲間マイケリス (Michaelis)、老境のカール・ユント (Carl Yundt)、また平気で人を裏切るオシボン (Ossipon)、また冴えない小柄なテロリストで爆弾信奉者のプロフェッサー (Professor) と呼ばれる人物といったアナーキストたちも決して魅力ある人物ではない。また彼を爆破事件へと駆り立てた大使館の一等書記官ウラジミール (Vladimir) や、ヴァーロックが警察と通じて

二重スパイを行っている相手警官のヒート（Heat）警部、またその上司の警視（Assistant Commissioner）などもすべて、社会的な立場とは裏腹に個人的な事情や欲のために本務を二の次にするような人物達で、およそ人間的な魅力や人徳を感じさせない連中である。

ヴァーロックは妻のウィニーとその母親、また知的障害をもっているが純真なウィニーの弟スティーヴィー（Stevie）と家庭を営んでいる。そこに多少なりとも人並みの安らぎを見出しているが、本人の生き甲斐は本来危険な政治活動にあるようであり、家庭の雰囲気は暗く倦怠気味である。そうした意味で家族のメンバーも生き生きと描かれているわけではない。

それではこの作品の魅力とは何かと追求してみるならば、作者の入念に練られたプロットと、都会の市井に潜むテロリズムを目立たぬ人間達が演出してゆくという奇抜な設定である。またある意味での緊迫感を備えた演出が、いつのまにかばかげた行為に陥ってゆく人間の愚かさというものを巧みに描き出している点である。そして独りよがりの考え方と性格のために他者の生き方や考え方を理解できず、いつの間にか自分の世界に浸りきり孤立してゆく人間達の模様が、よけいに説得力をもってくるのである。この作品はそうした人間の愚かさを通して描いたテロリストやテロリズムへの皮肉と告発のストーリーである。自分の考え方と世界から孤立することにより、不幸になる人間性を描いているとも言える。この論考においては、作品に現れる社会的秩序と独善的・個人的生き様との対立の構図を考察してみる。そして主人公ヴァーロックを中心に、テロリストであるが故に、社会的、思想的、そして家庭的に孤立して行く性行とプロセスを分析し、作家が告発する不条理な人間性を確認するものとする。

## 2. 社会性の欠如

ヴァーロックは本来テロリストに向くタイプの間ではなかった。確たる哲学や生き方が紹介されるわけでもなく、長年の怠惰の果てに肥満した体躯となり、平凡な家庭人を演じている主人公は、勤勉とは決別した生き方が身につけてしまっていた。むしろ勤勉と決別し、社会と生活の緊張と決別することが彼の哲学のようなものであった。すでに物語の最初の部分で、テロリストとは相反する彼の考え方が紹介されている。ある日、大使館に向かおうとする彼は、道すがらハイパークの近辺を通りかかり、町の秩序立った様子を見ながら次のような感想を抱く。

All these people had to be protected. Protection is the first necessity of opulence and luxury. They had to be protected; and their horses, carriages, houses, servants had to be protected; and the source of their wealth had to be protected in the heart of the city and the heart of the country; the whole social order favourable to their hygienic idleness had to be protected against the shallow enviousness of unhygienic labour. (12)

「この人たちは皆保護されなくてはならない」という発言は、テロリストとはおよそ無縁な言葉であり、ある意味ではヴァーロックの本音ともとれる言葉である。彼は本来プロのテロリストには向かないような人物であった。言わば確たる主義主張や思想がないままにこの世界に入ってしまったことが、彼の不幸な結果をもたらすことになる。また彼の性格については詳細に語られている。

His idleness was not hygienic, but it suited him very well. He was in a manner devoted to it with a sort of inert fanaticism, or perhaps rather with a fanatical inertness. Born of industrious parents for a life of toil, he had embraced indolence from an impulse as profound as inexplicable and as imperious as the impulse which directs a man's preference for one particular woman in a given thousand. He was too lazy even for a mere demagogue, for a workman orator, for a leader of labour. It was too much trouble. (12)

このように怠惰が生活の基本になっているような人物であった。しかし「ヴァーロック氏の顔立ちは決して残忍なものではなかった」(“Mr. Verloc's expression was by no means diabolic” 13) と述べられているように、おそらく作者が忌み嫌う「道徳的ニヒリズム」(“moral nihilism” 13) をたたえた人間たちとは異なる性格をヴァーロックは有しており、その点ではまだ人間的にまともな、救いようがある人物として描かれている。つまり作者にとっては怠惰な愛すべき社会人であり、テロリストとしては全く中途半端な人物ということになる。その愛すべき人間を犯罪者に貶める狂気という意味でも、テロを告発する効果をあげている。

テロリズムと無政府主義を扱う上では、当然思想的な背景を深く論じる政治小説的な部分があっても面白いと思われるが、思想というよりも主人公の生き方と考え方そのものが悲劇的な結末を導く骨子となっている。大使館の一等書記官ウラジミールに、「社会主義者かアナキストか」(You—a desperatre socialist or anarchist—which is it?” 21) と問われたときに、戸惑ったように「アナキストです」(“Anarchist” 21) と答える点からしても、思想的に確たる信念を持っている様子は窺えない。むしろ彼の生き方そのものがアナキーなものを感じさせるのである。コンラッドの作品における扱いにおいても、アナキストとテロリストが同等に置かれている様子が随所に感じられる部分があるが、社会秩序に反する者全てに対する作者の嫌悪が窺える部分である。

ここでもう1つ確認すべき点は、コンラッドの問題分析の手法である。理論的な分析よりも人物そのものの特徴や行動を通して問題の告発を行う手法が中心となっている。U.C. ノップフルマッカー(U. C. Knoepfmacher) は“*The Secret Agent: The Irony of the Absurd*”の中で、ヴァーロックの存在を通してのテロリストの描き方を以下のように指摘する。

But even though Verloc has no facts to offer to Vladimir, the facts Conrad wants to convey to the reader are there in Verloc's body, inert corpulent, lethargic. It is the fat man's uselessness, the absurdity of his role as Vladimir's agent, that makes this spurious anarchist an apt agent for Conrad's vision of a truly anarchic existence. (47, 下線筆者)

すなわち理論としてのアナーキニズムと言うよりも、ヴァーロックとその他の登場人物そのものを通してのアナーキニズムとその腐敗した実態が、重要な役割を果たしているという見方である。コンラッドの政治・思想犯の描写や告発は、こうした人物と性格描写によるものが中心である。もともと下宿屋を営んでいた彼の妻ウィニーの母親は、ヴァーロックの比較的穏やかな性格と面倒見の良さ、そしてある程度の経済力がありそうな様子を見込んで妻の婚として見初めた経緯がある。従ってヴァーロックには社会人としてのセンスやバランス感覚というものは本来備わっていたのである。しかし勤勉という哲学を持たない彼には、社会的な頭角を現すという希望や機会はない。大使館の以前の責任者であるヴァンテンハイム男爵 (Baron Stott-Wartenheim) の代わりに着任したウラジミールにも強い皮肉を言われる場面が登場する。彼は「諜報活動は慈善事業ではない」(“It is not a philanthropic institution” 22) と述べ、ヴァーロックの怠慢を非難する。彼はヴァーロックが勤勉であり社会的な志もあったならばかなり出世していたであろうという皮肉も述べるが、もしそうだとしたらヴァーロックはテロリストにもなっていなかったはずである。

新任のウラジミールは英国社会を震撼させるような事件を起こして、アナーキスト連中や不穏分子を一掃させる契機にしたい旨を伝え、今までのような生ぬるい中途半端な活動を非難する。そしてヴァーロックにグリニッジ天文台爆破という使命を押し付けるのである。もちろん怠惰が行動原理の彼にしてみれば、そのようなことははなからやりたいとも思わないし、「社会秩序を乱さないこと」がテロリスト、ヴァーロックの信条である。しかし命令に従わなければスパイとしての雇用を失うとなればやらざるを得ない。ここに体裁の悪いテロリストのストーリー展開が始まるのである。

あと少しの社会性があれば全くのお人よしの社会人として暮らせたはずの人物が、歴史的なテロ行為の主人公となってしまう契機が生じる。キャラクターの設定から考えるとヴァーロックは平凡な市井人として生きる資質は備えていた。しかし全てにおいて一途な取組を行わない態度、また怠惰な性分が次第に彼の社会性を奪い、自分の考え方や世界を正当化するような性向を与えてしまった。コンラッドにとってみるとテロリズムというようなものは作中のヒート警部が非難するように、窃盗と比べても支離滅裂な行為と映っていたに違いない。

この作品の登場人物たちを確認すると秩序の問題が頭に浮かぶ。ヴァーロック以外のテロリストたちをみると、確かに世間一般の秩序を守ろうとする観念は存在しない。たとえ

存在するにしても極めて希薄ということになる。しかし完全に錯乱していない以上、彼らは彼らなりに思想の理論はできているのであり、それは一種の個人的な秩序というものである。この作品においてはそれぞれの登場人物が、各々完結した秩序をもってはいるが、社会と個人的な秩序が相容れぬ状況になっているか、かなり自己中心的な考えが強いために、異様な行動をとり、奇異に映る態度をとることになる。そうした人物群の組み合わせが、この作品に独特な政治小説、あるいは社会小説としての雰囲気を与えている。ヴァーロックはそうした意味で、事件を起こすまではかなり社会と個人の秩序を守ろうとする奇妙なテロリストであったと言える。しかし彼には信念を貫くだけの意志や勤勉さが欠けていた。むしろ欠けていたからこそテロリストという道に踏み込んでいったともいえる。そうした意味でこの物語は意志が弱い者の悲劇なのである。さらにテロリストたちをある意味滑稽化して描くことにより、さらに無政府主義の稚拙さと虚しさを告発する効果ももたらしている。ジョスリン・ベインズ (Jocelyn Baines) は *Joseph Conrad: A Critical Biography* の中で作家の意図とヴァーロックの行動とを分析し、“And yet it is comedy: the public, the nonsolipsistic art. The entirely rational author watches with amusement and scorn the respectability of the criminal and the laziness of the violent, and watches Verloc’s blind egoism bring on his own ludicrous destruction” (219) と述べ、ヴァーロックの性格が「馬鹿げた自滅」 (“his own ludicrous destruction”) をもたらしたことを指摘する。以上のように中途半端なテロリスト、ヴァーロックがついに社会秩序を乱す計画を実行する経緯の中で、本当の孤独に陥ってゆくのである。

彼は環境にすこぶる左右されやすい人物であった。彼をとり囲む人物たちも、先ほどの個人と社会の秩序という点に関しては、かなり危ういバランスの者たちばかりである。つまり常識的に考えて秩序を優先させなくてはならない人物たちが、社会を脅かす行動をとり事件の発端ともなる。大使館の一等書記官ウラジミールがテロを真っ先に画策する点は、この物語の骨子としては効果があり、ロシアを嫌悪していたコンラッドの立場としては、打ってつけのお膳立てともいえる。またヴァーロックをテロリストたちの動向を探る情報源として利用していたヒート警部は、捜査中になるべくヴァーロックをかばおうとしてミハエリスを犯人と決め付けようとする。しかし彼の上司である警視は、自分を引き立ててくれたある貴婦人がミハエリスの後ろ盾となっているので、ミハエリスをかばおうとするのである。こうした一連の個人的な事情が社会的な秩序を脅かし侵すという流れが、さらに物語の性質と複雑さを増幅している。

### 3. 社会的孤立

ヴァーロックの周囲のテロリストたちも各々個人的な世界と秩序に凝り固まっていると言える。社会的な秩序とアナキストたちの関係についてジョン G. ピーターズ (John G. Peters) は、“*The Secret Agent investigates the seedy under world of London’s radical politics*

in which revolutionaries and Anarchists work against mainstream Western civilization. Conrad is dearly contemptuous of these radicals” (*The Cambridge Introduction to Joseph Conrad* 80) と述べ、この作品には西欧文明に対する、反社会的な行為としてのテロリズム批判が現れている点を指摘している。すなわち作家の意図として、大きな社会的秩序に対する反抗的な存在を描こうとしていることは明らかである。仮出獄中のミハエリスは長い獄中生活にもかかわらず異常に肥満してアジ演説を行うにも息をきらせ、自己管理もままならぬ状況である。老人のテロリスト、カール・ユントは今にも倒れこみそうに杖をつきながら自身のテロリズムの理想を震える声で語りかける。また一番まともそうな元医学生オシボンですら生半可な科学知識をひけらかし、若者を中心に世の中が墮落していると吹聴する軽薄なプロパガンディストである。ヴァーロックはこうした個人的都合を中心にした人物たちと交流することによって、社会的な秩序を忘れてゆくプロセスをたどることになる。彼は意志の弱い人間であり、環境に流されやすい傾向がある。それは生来の怠惰癖に由来し、生活上の危機が発生しない限り、本腰を入れて物事にあたろうとしない態度が根本的な問題でもあった。そもそも彼がテロリストになる契機や哲学も語られてはおらず、現在ではあくまでも生活の為に大使館と警察とのスパイに成り下がっている。ウラジミールからも肥満した体軀や結婚している状況を「テロリストらしからぬ状況」として非難される。

社会的秩序と個人的秩序がうまく作用して、初めてコンラッド的な秩序ある世界観が営まれるわけであるが、それは長年船員と船長を務めた船上の秩序にも結び付くものであった。『ナーシサス号の黒人』にもみられるように、コンラッドの統一された世界観には、1つの目標のために人々が力を合わせてゆくことへの美学というものが感じられ、それが一種の社会的秩序として現れているのである。したがってそうした社会的な均衡を維持するもの、また破壊するものを念頭において、作者は人物たちを創造しているように思われる。ヴァーロックは性格と意志の弱さから次第にテロリストへの道を辿ってゆくことになる。だが彼の目的はあくまでも自己満足的な「社会機構の維持」であった。また彼が大使館の二重スパイを行うようになったいきさつには、確かに生活の維持もあったに違いないが、矛盾するテロの防止という活動にも参与しているという自負の念が窺える。すなわちテロリストとして出発しながら、二重スパイとしてテロを防止することで社会秩序の維持に貢献しているという勝手な自負の念である。

しかしこのような独善的な世界観がいつまでも通用する訳はなく、そうした矛盾をウラジミールに突かれる形となる。彼はヴァーロックの長年にわたる報告や諜報活動などは実質的にテロリスト掃討のためには何ら役に立っていないことを非難し、もっと社会を根底から揺さぶるような行動を起こせと命じる。「ミラノの協議会」なるテロリスト対策を検討する国際会議が開催される機会を利用して、わざと大きなテロを引き起こし、世界的なテロ掃討の活動を起こさせようと目論むのである。この点に関してコンラッドは、世界秩序（あるいは一国の秩序）を維持せんがために他国の秩序を犠牲にするような発想を告発しているが、こ



うした発想そのものがテロリズムの本質であることを描いている。

また祖国ポーランドが他国の思惑により長年晒されてきた悲痛な運命や、長年船員として生活してきた経験を鑑み、コンラッドは本質的に健全な秩序とはどのようなものか常に考え、また感覚として会得していたのではないかと考えられる。ベインズはこの作品でのウラジミールの存在に関して“*In Mr Vladimir, with his contempt for Western legality, Conrad expresses something of his dislike of Russians and Russian methods*” (338) と述べ、コンラッドのロシアに対する政治的な嫌悪を指摘している。これは確かに自明のことであり、このことを考慮することにより、テロの立案者であるウラジミールの存在がより説得力を帯びることになる。そしてウラジミールがヴァーロックに命じたテロの対象は科学と秩序の象徴であるグリニッジ天文台を破壊することであった。

“There could be nothing better. Such an outrage combines the greatest possible regard for humanity with the most alarming display of ferocious imbecility. I defy the ingenuity of journalists to persuade their public that any given member of the proletariat can have a personal grievance against astronomy. Starvation itself could hardly be dragged in there—eh? And there are other advantages. The whole civilized world has heard of Greenwich. The very boot-blacks in the basement of Charing Cross Station know something of it. See?” (34-35)

このようにして最終的に近代人が頼りにする、科学的な知識や秩序を象徴するものを破壊する、という目的が生まれる。そしてそれがテロリズムの行動原理の象徴となり、近代の合理主義と真実探求の原点を破壊しようとするのである。コンラッドが告発しようとするテロの危険性とエゴイズムを暴き出すためには理解しやすい描写である。

平凡な性格と考え方のヴァーロックが、気がすすまぬまでもそれをやらざるを得ない状況に追い込まれるには、入念で興味深いお膳立てがコンラッドによって整えられている。先ほどの自己中心的なテロリストの中でも最も貧相な1人、プロフェッサーと呼ばれる爆弾崇拜者がうまい具合に爆弾を用意してくれる。周囲の環境に流されながら次第にヴァーロックの社会秩序へのバランスが崩されてゆき、最終的にグリニッジ天文台破壊という象徴的な自己崩壊へと繋がってゆく過程が描かれるのである。ミハエリスを犯人にすることが都合のよいヒート警部と、またその逆の立場の警視のやりとりなど、全て個人的な都合と秩序の中でストーリーが進む点が象徴的である。1人も社会秩序維持のために働くものがない。この点がこの作品の特異な部分と言えるであろう。それ故にテロリズムと無政府主義の告発には役立ち、登場人物たちに魅力を感じる者はいないわけである。エイヴラム・フレッシュマン (Avrom Fleishman) は“*The Symbolic World of *The Secret Agent**”において、“*The Secret Agent is, then, not as much a novel about political anarchism as it is a novel about social*

anarchy, it is a dramatic portrayal of the sociological concept of anomie—radical disorder in the social structure and consequent personal dislocation” (29, 下線筆者) と述べ、この作品が「政治的なアナーキズムというよりも、社会的機構の無秩序やその結果生じる人々の混乱を描写している点」を指摘する。そうした意味でこの作品の人物描写が、一見秩序と魅力のない者たちを描いていることは当然とも考えられる。

ここで人間的な感情と繋がりを演出する人物は、唯一スティーヴィーの存在であろう。ヴァーロックの妻ウィニーの弟で知的障害の不幸を背負ってはいるが、心はとて純真であり、テロや暴力、血液に関することが少しでも耳に入ると感情を取り乱してしまう性格である。しかしするどい感受性を持ち、普通の人間のように利害で行動することがない。もちろんウィニーは彼が幼い時から世話をしてきたが少しも重荷に感じることはなく、むしろ彼の存在を生きがいに思っている。それに対してヴァーロックは結婚以前の下宿人の時代からスティーヴィーを気にかけておらず、妻が飼っているペット程度の気遣いしかしていなかった。だがむしろどのようにスティーヴィーに接したらよいかわからなかった、と言うべきであろう。この物語の特徴と悲劇性は、登場人物たちが個人の世界観と都合のみに拘泥し、他者の感情や発想を理解することができない、また理解しようとしめない点に発している。ヴァーロックの場合も、妻は当然彼と同じ価値観やものの考え方をもっていると信じ込んでいたし、スティーヴィーに対してはお互いに大したこだわりはないと思いつけていた。そこでテロに関して信用できる仲間がいないと判断した彼は、スティーヴィーを爆弾の仕掛け人に利用するといった、安易で恐ろしい計画を簡単に考えだしてしまうのである。

この物語に現れる孤独は、本人たちも気づかないうちに、社会秩序と個人の生き方との乖離が生じ、最後には個人どうしの考え方や価値観の乖離が生じてくることに起因している。スティーヴィーはそうした意味で、個人的な利害に対する感覚が希薄な立場であるがゆえに、彼に関わるそれぞれの人物たちの価値観や考え方を映し出す存在となる。ヴァーロックはスティーヴィーに対する扱いが物質的であるがゆえに、彼の発想は利害に基づく関係にあり、社会秩序と個人的な都合との間で揺れ動いている。そして彼のバランス感覚を損なうものは、彼の怠惰というつまらない性質に起因していることから英雄的な要素は見当たらない。そしてスティーヴィーが彼に抱いている畏怖と敬愛の念には全く気付かないのである。社会に関するものであれ、個人的なものであれ、人間が作りあげる秩序である以上、愛情と相互理解という要素は重要であるが、テロリストたちと中途半端なテロリストであるヴァーロックにはそうした要素が欠けている。このような登場人物どうしの不理解に関してレオ・グルコ (Leo Gurko) は *The Two Lives of Joseph Conrad* の中で、以下のように分析している。

The novel is a tragedy of misunderstandings. Nobody understands anyone else. Winnie has no idea of what Verloc is doing, and Verloc is astonished when his wife suddenly assaults him with a kitchen knife. Inspector Heat and his superior, the Assistant

Commissioner, are at cross purposes, and the anarchists, though bound together in a common cause, either quarrel incessantly or are ignorant of one another's motives. In a sense, all the figures are secret agents, secret from one another. (153-54)

すなわちヴァーロックだけでなく妻ウィニーをはじめ登場人物たちの多くが、自分の利害や考え方以外のことに無関心である点を指摘する。これは作者が作り出そうとする物語の雰囲気と人物たちの孤立や孤独という世界に関して重要な要素なのである。そしてお互いの「誤解」(“misunderstandings”)が孤独を生み、混乱した環境と分裂した人間関係の悲劇が生まれるのである。

#### 4. 家庭的孤立

個人的な考えに基づく世界観を個人的な秩序と考えるならば、家庭は社会に次ぐ重要な世界ということになる。物語の冒頭からヴァーロックは家庭生活に重きをおいていなかった。彼の家族の構成は、妻のウィニーとその弟のステイーヴィー、そしてウィニーの母親という構成になっており、ヴァーロック自身の生い立ちなどは紹介されていない。彼が結婚以前に義母が営んでいた下宿に間借りしていた際に、人柄や多少経済力がありそうな人物として彼女に見初められたという経緯以外は語られていない。

この物語においては、コンラッドは意図的に人間的な繋がりを描くことを避けているように感じられる。登場人物の孤独が描かれているコンラッド作品は多いが、そのほとんどにおいてある程度心のよりどころとなる人物や思想が語られる部分がある。しかしこの作品に関しては、ヴァーロックが心をゆるし本音を打ち明け、また心から気持ちが惹かれあう人物は登場しない。むしろ彼のほうから深い関係を拒んでいる経緯もあるが、家庭人として生きる覚悟や心構えをもたないことがもう1つのヴァーロックの不幸とも言えよう。表向きは怪しげな物品を売る雑貨店を営み、ほとんど店番も妻に任せている内容や、妻が嫌がるにもかかわらずテロリストのたまり場として家を利用している点など、家庭生活も一種の隠れ蓑のような存在であり、彼があまり価値を見出していない様子が窺える。この状況にも、人生の成り行きで家庭をもつことになった彼の信念のなさや怠惰が現れている。ウラジミールにテロリストが結婚していることはおかしなこと、となじられる場面がある。

“Oh, yes, it is,” snapped Mr. Vladimir. “I am beginning to be convinced that you are not at all the man for the work you’ve been employed on. Why you must have discredited yourself completely in your own world by your marriage. Couldn’t you have managed without? This is your virtuous attachment—eh? What with one sort of attachment and another you are doing away with your usefulness.” (36, 下線筆者)

このウラジミールの批判的な言葉は単なる激昂から出ただけではなく、かなりヴァーロックの生き方の本質をついた内容にもなっている。「1つ得るものがあれば、1つ有用なものがなくなる」という指摘は、彼の非生産的な人生に対する皮肉である。信念よりも怠惰と成り行きにまかされた生き方が、様々な秩序と相反する道をとらせ、最終的に行き場のない孤独、不幸へと彼を導いてゆくことになる。

家庭的な秩序という点に目を向けると、ウィニーの母親は常識的な点で一番社会と家庭の秩序に即した生き方をしていると言えよう。(その正体を正確にはつかんではいなかったが)娘や精神的障害をもつ息子の面倒を見てくれそうな人柄と経済力がありそうなヴァーロックを認め、自分の健康状態や将来の不安を考えた時に、組合の貧窮院に1人身を引いて転居する行動をとる。そのためにステイーヴィーは精神的に落ち込んでしまうことになるのだが、ある意味ではこの母親とステイーヴィーがヴァーロックに対して一番思い遣りをもち、気を遣っていたことになる。しかし家庭的な秩序というものにさほど重要性を見出さない彼は、その愛情を理解することができないのである。その証拠に、義母が貧窮院に引っ越したことをウィニーから聞いたときも、大した関心を示すことはなかった。

ヴァーロックは大使館や警察と繋がることでテロリストたちを裏切る二重スパイであるが、また家庭に対するある意味での裏切りもおこなっていることになる。しかも自分の生き方にさしたる信念や哲学もないことから、彼のアイデンティティーというものが見えてこない状況にある。そうした全体的な人格が彼の魅力のなさに繋がっているわけであるが、この作品の主な登場人物たちが多かれ少なかれ彼と同じような人格を有しているわけである。ウィリアム W. モズリー・ジュニア (William W. Moseley, Jr.) は “The Vigilant Society: The Secret Agent and Victorian Panopticism” の中で、ヴィクトリア朝社会が一種の成熟したものとなっており、出来事や事件が社会現象として捉えられていたと指摘する。そうした意味では成熟した社会である当時のロンドンが、全体的に社会現象の一部としてテロリズムをとらえている部分があるとみなし、コンラッドが描くテロリストたちは、個人というよりも社会構造の一部として描かれている点を示唆している (75)。以上の点を考慮に入れると、社会と個人の繋がりを通して、コンラッドが意図的に作り出す登場人物の特色が理解できる。すなわち個人としての描き方も大切であるが、彼ら全員を通してテロリストの組織や概念を表す効果も認められるのである。

次にヴァーロックの家庭生活にもう一度目を向けてみる。本来家庭の秩序というものは愛情を核に形成されるべきものであろう。そうした意味では一番気持ちや感情に純粋なステイーヴィーが試金石のような働きを担っている。リチャード・カール (Richard Curl) は *Joseph Conrad and His Characters* の中で “And to have maintained the same level throughout, never exaggerating or underestimating his special niche, as of a person hovering between two worlds, so that it all rings true to the idea of him we have formed, was a very great achievement” (132) と分析し、ステイーヴィーが社会と家庭の二つの世界を行き来し、

真実を照らし出す役割をもつことを指摘する。実の父親からあまり優しい扱いを受けてこなかった彼は、もちろん母親やウィニーの嫉もあるのだが、ヴァーロックに対して唯一男性に向ける尊敬の念と愛情を感じていた。しかしヴァーロックはそれを感じ取る気持ちも気質も持ち合わせてはいなかった。ヴァーロックは秩序という意味が分からない人間ではない。ただあくまでも通り一遍の理屈や見た目で物事を判断してしまう傾向があり、結局深い考察や感情のレベルまで掘り下げて考えることが出来ない。したがってどうしても物事の体裁を繕うようなことしか出来ないわけである。

コンラッドの小説に関しては、主立った人物達が文化や言葉の違いにより他者との誤解が生じ、不幸な結末を迎えるという場面設定が多く見られる。この物語の場合ヴァーロックは父親がフランス人ということになっており、多少国際的環境を備えている人物設定となっている。また国際テロの引き金となるのも、ウラジミールという外国人の画策なので、ここにも異文化や異質な思想というテーマが盛り込まれている。冒頭からテロリズムや無政府主義に対する違和感と告発の意図が濃厚な作品で、偏った主義主張と社会秩序や常識との軋轢が目立つ作品と言えよう。家庭問題においては個人の考え方や感情、行動パターンがその浮沈に大きく影響を与えるために、3人の構成メンバーの様子が如実に反映されている。ヴァーロックが社会的に不幸に陥ってゆくプロセスと原因は、すでに家庭生活におけるある程度の失敗と破綻に起因しているのである。言わば彼の社会における活動と家庭生活が一種の二重プロットのようになり、お互いの矛盾と欠点を映し出す関係にもなっている。

スティーヴィーは目に映るものに純粋に反応し、また正直に感想を述べる若者である。テロリスト達が家で過激な論争に花を咲かせている様子を見て、その血なまぐさい内容に興奮しショックを受けてしまう場面が描かれる。また彼らの一見意味不明の議論を聞きながらスティーヴィーが紙に無数の円を書き付けており、オシボンがそれに批評を加えるという場面が登場するが、やはり無政府主義に対する無意味さと荒唐無稽さを揶揄する場面とも捉えることが出来る。とにかくスティーヴィーの暴力に対する激しい嫌悪は、作者自身の嫌悪の現れとも言えよう。また母親が貧窮院へ引越す際に、ウィニーと馬車で母親を送ってゆく場面が描かれるが、御者が馬に鞭を加える様子にスティーヴィーがひどく興奮し、危うく事故になりそうな出来事が起こる。スティーヴィーは馬に同情しただけであるが、それが契機となり、御者は貧しい家族を養う為に馬をむち打つという矛盾に憤慨し、また哀れな民衆を守ろうとしない警察にも矛盾の憤りを向ける。

“Not for that?” He mumbled, resigned but surprised. “Not for that?” He had formed for himself an ideal conception of the metropolitan police as a sort of benevolent institution for the suppression of evil. The notion of benevolence especially was very closely associated with his sense of the power of the men in blue. He had liked all police constables tenderly, with a guileless trustfulness. And he was pained. He was

irritated, too, by a suspicion of duplicity in the members of the force. For Stevie was frank and as open as the day himself. What did they mean by pretending then? Unlike his sister, who put her trust in face values, he wished to go to the bottom of the matter. He carried on his inquiry by means of an angry challenge. (172-73, 下線筆者)

こうしたやりとりは、今まで知的で込み入った話を苦手とするスティーヴィーがなぜこの時点でいきなり理論的な意見を述べ出すのか、という疑問も提起するのであるが、コンラッドが普段感じている社会機構に対する矛盾と憤りを素直にスティーヴィーの口を借りて吐露したと言える。このようにしてヴァーロックが最も気に掛けていないスティーヴィーが一番の批評家となり、ヴァーロックが行っているばかげた生き方と行為を揶揄していると考えられるのである。ヴァーロックは自分自身の生き方の二重性や矛盾に対して気に掛けている様子もなく、自己保身や利害にとらわれている警察官ヒートにも情報を流しているのである。

こうしてヴァーロックはスティーヴィーの行動を見て社会的に愚かと考え、自らの愚かさに気づいていない。また妻ウィニーを分析するならば、最終的にヴァーロックが弟スティーヴィーを利用して爆弾テロを試み、誤って弟を死なせてしまったことを知り大いにショックを受け、最終的にヴァーロックを刺殺してしまう。ウィニーは確かにある程度常識的な女性であった。家族に対する愛情をもち、また社会的な常識もそれほど問題のある点はなかったと言えよう。しかし他の人物達と同様に、自分の世界と価値観に浸りきってしまう傾向があった。自分自身の築き上げた秩序というものにこだわり過ぎたのである。

彼女の人生にとってスティーヴィーの存在は精神的に非常に大きなものであった。その弟が突如夫によって奪われ、彼女は自分の行き先が見えなくなってしまう。そして人生に対するこだわりが急になくなったかのように、「自由な身」(“a free woman” 251) になったのだと錯覚する。この自由の身という感覚は、彼女の1つの秩序の崩壊を意味する言葉ともとれる。つまりスティーヴィーや母親の世話は彼女の生き甲斐であったわけであるが、また生活の一部であった。生活の一部ということは、さしたる理由もなしに個人の生活やある考え方の秩序の一部に成りうるわけである。ウィニーにとっては2人の肉親はかけがえない存在であった。「自由の身」という表現は巧みであるが、やるべきこと、また生活の一部がなくなってしまう場合には、誰にでも訪れる精神的な空虚さとも言える。彼女の生活の秩序が崩壊してしまったからには、またその一部であったヴァーロックの存在も無意味なものになってしまったわけである。

This shaking piece of forgetfulness stimulated Mrs. Verloc's intelligence. She began to perceive certain consequences which would have surprised Mr. Verloc. There was no need for her now to stay there, in that kitchen, in that house, with that man—since the boy was gone for ever. No need whatever. And on that Mrs. Verloc rose as if raised by

a spring. But neither could she see what there was to keep her in the world at all. And this inability arrested her. Mr. Verloc watched her with marital solicitude. (251, 下線筆者)

さしたる理由もなしに、二人の必要性に応じて結びついていたという一種の和合が崩壊してしまったわけである。そうするとヴァーロックは、すでに彼女にとっては存在価値のない足かせにすぎなかった。

ヴァーロックにしても本来大した思想や哲学、信念もなしにテロリストを自称するような生活を送っているわけであるが、物語の冒頭の部分で彼の使命は「社会機構の保護」(“the protection of the social mechanism” 15) であるという平和主義者のような考え方が紹介される。平和主義のテロリストなどというものは矛盾をはらんでいる内容であるが、彼が二重スパイの生活に入り、仲間やその計画を官憲や大使館に売り渡すことにより、自分ではテロ活動を防止して社会の役に立っているという自己満足に陥っている。こうした生活自体、矛盾した秩序と言えるであろう。したがってウラジミールに実際にテロを行うように命じられた時点で、それが彼の秩序を崩壊に導く行為であることは感じ取ったはずである。しかし生来の怠惰と妥協癖の為に、結局中途半端な気持ちで実行に移してしまう。ここで彼の生活や精神的な秩序は崩壊し始めたと言ってよかろう。しかし彼はそれを強い自覚もないままに実行し、失敗し、社会秩序を侵した。もちろん社会的にさらに孤立することは目に見えているわけである。しかし家庭的には他者の考えや感情をそれほど慮る性格でない彼は、妻の精神的崩壊に配慮する気持ちも余裕もない状況であった。そして彼女の家庭的な秩序の中からはじき出されたヴァーロックは、家庭的な枠組みからも孤立することになったのである。

## 5. 結び

コンラッドのストーリーには、特殊な運命や環境におかれることにより孤立し悲劇的な末路をたどる主人公がしばしば登場する。しかし殆どの場合、彼らには懸命に人生を生き、激流のように押し寄せる宿命の流れと必死に戦う姿が見られる。ジムやノストローモ、ラズモフなども彼らの運命を切り開こうとする一途が見られた。それ故にある種の感動を呼び起こす力があつた。しかしヴァーロックに関しては妥協や諦め、怠惰といった生活と精神のしまりのなさが目立つのみである。

しかしこの作品の特異性は、舞台がコンラッドが得意とする船上や海洋にまつわるエピソード、海外の事件に取材するものではなく、実生活にまつわるイギリスとロンドンを舞台としていることやテロリズムに関する告発と無意味さを強調している点である。彼は帝国主義的な侵攻に異議を唱える一方で、イギリス的な社会秩序に関してはかなり信頼し気に入っているような態度をとっている。おそらく外国人に対してもある程度寛容に受け入れるイギリス的機構や秩序というものに対して、共感する部分があつたのではないかと思われる。コ

ンラッドの受け入れる社会秩序とは、理論よりもむしろ実践的にその住人が安心して幸せに暮らしかどうかという感覚に基づいていたのではないかと考えられるのである。そうした彼独自の秩序観を乱すテロリズムや無政府主義に関しては、思想以前に感覚的に強く嫌悪を感じていたことであろう。

この作品の魅力は彼がそうした自分の秩序観に基づいてテロの愚かさや危険性、またある意味で悲劇性を描写しているところにある。高度な知識を身に付けながら誤った個人的思想と行動原理をもつために、社会に受け入れられずに生きてゆくテロリストたち、また同様に誤った秩序観をもとに他国や社会を混乱させる外交官や警察官、そうしたコンラッド的な社会観をヴァーロックというどっちつかずの人物を通して巧みに描いている。また家庭的な部分においてもコンラッドが考える健全な秩序というものは存在するのであり、それに反する者は社会生活と同様に家庭生活からも追放される、という二重プロットのメッセージも込められている。その両方から除外されたヴァーロックは、完全に孤独な存在になったのである。もちろんそれに気づく暇もなく妻に刺殺される点はさらに皮肉である。最後にウィニーは自分の犯した罪の重大性に気づき、テロリスト仲間の中でも一番頼りになると思い込んでいたオシボンに、国外に一緒に逃げてくれるように頼む。オシボンは全財産を持ち出して来たウィニーとパリへ列車で逃れる手はずを整え駅にやってくる。そして一度は2人で列車に乗り込むが、プラットホームから列車が出る瞬間に、オシボンは金とともに車室から一人飛び出して、ウィニーを置き去りにしてしまうのである。そして後日プロフェッサーの部屋で話をしていたオシボンは、海峡連絡船の上から飛び込み自殺を遂げた女性（ウィニー）の新聞記事を所持していた。

彼女の行動は確かに短絡的であり後先の見境もなく実行された観があるが、これも1つの秩序の崩壊がもたらした結果ともとらえられる。彼女の価値観は弟と母親の存在が重きをなしていたが、手許から2人はいなくなる。しかし家庭的な理由で生活していた夫を自らの手で刺殺するという事は、自分の手で自分の秩序を破壊したのだということに当初は気づかなかったのである。

彼女の死を報道する記事には、彼女の身元は確認されずに最後のコメントとして「狂気か絶望としか思われぬこの行為は、解くことができぬ永遠の謎であろう」（“An impenetrable mystery seems destined to hang for ever over this act of madness or despair” 307）と記載されていた。オシボンは妙にこの一節に興味と恐怖を感じる。それは自らの生き方と将来を暗示しているかのようであったからである。おそらくコンラッドのテロリズムに対する観念が、ここに示されているものと考えられる。また爆破事件の少し前にスティーヴィーをあずけていたミハエリスは自叙伝なるものを執筆している様子であったが、そのタイトルたるや「信念・希望・慈愛」（“Faith, Hope, Charity” 303）という皮肉に満ちた内容であった。

コンラッドは実体験として人の営みと秩序を重んずる考え方をもつ傾向があるが、最終的に社会秩序と相容れないテロリズム、テロリストの思想というものが独断の中での行動でし



かないことをはっきりと示している。また常識的な人間の中にも一歩間違えれば狂気に導かれる危険性が確実に潜んでいるという警鐘をこの作品全体で訴えている。確かにこの作品には英雄も尊敬に値する人物も登場しない。しかし唯一しっかりと他者を思い遣り、自分の身を処したウィニーの母のみが健全な社会人として描かれており、「勇気ある婦人」(“The heroic woman” 163) という表現を与えられている。こうした描き方を見ても、社会秩序とそれに相対する混乱と危険な思想という大局的な価値観の中で、作者は社会とテロリズムの分析、そして批判を行っている。コンラッドは彼らが孤独に至るまでのストーリーの中で、公正な秩序を重んじることを規範としてテロリストの行動や思考を分析し、その不条理と矛盾点を巧みに描き出したのである。

#### 引証文献

- Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. London: Weidenheld and Nicolson, 1960.
- Conrad, Joseph. *The Secret Agent: A Simple Tale, The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad*. Vol.10. London: Gresham, 1925.
- Curl, Richard. *Joseph Conrad and His Characters*. London: Heinemann, 1957.
- Fleishman, Avrom. “The Symbolic World of *The Secret Agent*.” *Joseph Conrad: Critical Assessments*. Ed. Keith Carabine. Vol.3. Mountfield: Helm Information, 1992. 11-29.
- Gurko, Leo. *The Two Lives of Joseph Conrad*. New York: Thomas Y. Crowell, 1965.
- Knoepfmacher, U.C. “*The Secret Agent: The Irony of the Absurd*.” *Joseph Conrad: Critical Assessments*. Ed. Keith Carabine. Vol.3. Mountfield: Helm Information, 1992. 45-68.
- Moseley, Jr., William W. “The Vigilant Society: *The Secret Agent* and Victorian Panopticism.” *Conradiana* 29 (1997) : 59-78.
- Peters, John G. *The Cambridge Introduction to Joseph Conrad*. Cambridge: Cambridge UP, 2006
- Surgal, Jon. “*The Secret Agent: A Simple Tale of X IX Century?*” *Conradiana* 29 (1997) : 123-32.